

地域防災力向上を目的としたワークショップにおける

住民の社会的ネットワークに関する研究

熊本大学
熊本大学大学院

学生会員 ○米田 恭子
正会員 松田 泰治

熊本大学大学院
熊本大学大学院

正会員 藤見 俊夫
正会員 柿本 竜治

1. はじめに

災害による被害を最小限に抑えるためには、ダムや堤防などのハード対策だけではなく、要援護者の避難支援、自主防災組織の設立、マイハザードマップの作成などのソフト対策も重要であることが知られている。こうしたソフト対策を行うためには、住民が自主的に協同して活動する必要があり、その基盤となる人的ネットワークの構築が重要な課題となる。

防災・減災を目的とした人的ネットワークの構築には、避難訓練、ワークショップ、防災まちあるきなどのイベントの開催が効果的であると考えられる。しかし、そうしたイベントに参加する住民は、高齢の男性に偏るという問題が指摘されている。ソフト対策の効果を高めるためにも、多様な住民の参加を促す方法を開発することは重要な課題である。そのためには、イベントに参加する「きっかけ」を明らかにする必要がある。これまで多くのアンケート調査から、イベントに参加した理由として「知人に誘われたため」という回答が多いことが明らかになっている。そのため、イベント参加者の人的ネットワークの実態を明らかにすることは、多様な人々をイベントに参加させるための有益な知見となると期待される。本研究では、熊本市向山地区で開催したワークショップを事例として、参加者の人的ネットワークの実態を明らかにし、多様な住民の参加を促すための手掛かりを検討する。

2. 方法

本研究は、熊本市向山校区を対象に開催した防災ワークショップのデータをもとに行う。ワークショップでは毎回、アンケート調査を行う。アンケートの内容は以下に示す。

- このワークショップについて、誰からお聞きになりましたか？その方との関係は？
- あなたは日頃どのような活動に参加されていますか？
- この地域での居住年数はどのくらいになりますか？
- 近所の方とおつきあいはどの程度ですか？

- 前回のワークショップの感想をお聞かせください。

これらのアンケート内容をもとに、社会的ネットワーク図を作成する。さらにそのネットワーク図から、①核となって参加者を集めている人物、②参加者を増加・減少させる要因の2つの項目について分析していく。

3. 集計結果と分析

3.1 ワークショップ内容と参加状況

ワークショップの内容及び参加状況を表-1 に示す。

表-1 ワークショップ内容と参加状況

	参加人数(人)			内容
	過去	初	合計	
第1回 (2009.10.27)	—	40	40	防災クロスロードクイズ
第2回 (2009.11.25)	20	13	33	要援護者の支援策について考える
第3回 (2010.01.14)	21	11	33	避難訓練向山方式について話し合う
第4回 (2010.02.20)	64	87	151	防災避難訓練と健康フェスタ
第5回 (2010.03.13)	10	13	23	まとめ

3.2 ネットワーク図

アンケート結果から作成したネットワーク図を以下に示す。このネットワーク図は、人物の相互関係と、誰が誰にという関係の「向き」を表している。関係性については、親族(赤)・近所(青)・友人(緑)・自治会役員(黄緑)・自主防災組織(橙)・その他(紫)の5つに分類して示している。関係性がこのどれにも当てはまらない、または不明な場合は黒のベクトルで示される。

尚、現段階ではアンケート内容が不明瞭だったものは、データとして扱っていない。

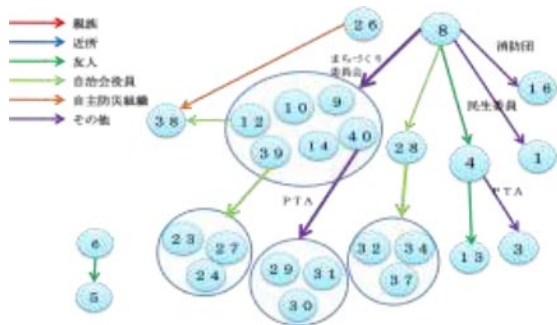


図-1 第1回ワークショップ

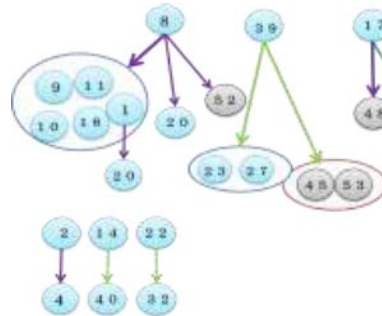


図-2 第2回ワークショップ

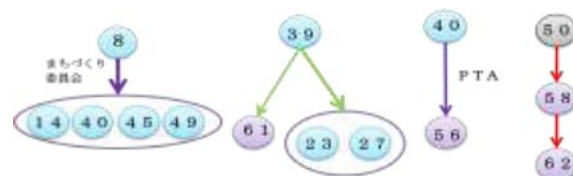


図-3 第3回ワークショップ

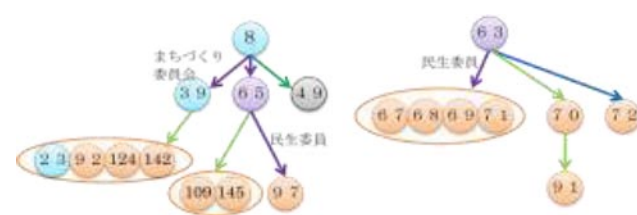


図-4 第4回ワークショップ

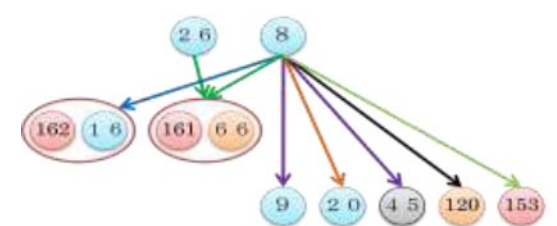


図-5 第5回ワークショップ

3.3 分析と考察

(1) 核となっている人物について

ネットワーク図から、一貫して最も多くのベクトルを発し、また派生させているのは 8 であることが分かる。第 2 回、第 3 回では 39 や 63 も多くのベクトルを発している。8 は、実に多くの組織に属していることが図から読み取れる。赤色以外のすべての色のベクトルを発しており、紫のその他も含めて見てみると、少なくとも 5 つの組織に所属していることになる。

他の 2 人に関しては特に多くの組織に属しているようには見えない。よって日ごろの活動に注目した。

表-2 日頃の活動と参加状況

地域活動	参加状況の平均		核人物の参加状況	
			8	39
A	参加率(%)	62.8	○	○
	参加回数(回/月)	1.6	4	3
B	参加率(%)	18.6	×	○
	参加回数(回/月)	1.2		1
C	参加率(%)	11.2	○	×
	参加回数(回/月)	0.6	0.1	
D	参加率(%)	9.8	○	×
	参加回数(回/月)	1.4	4	
E	参加率(%)	34.4	○	×
	参加回数(回/月)	4.1	2	
F	参加率(%)	30.9	○	○
	参加回数(回/月)	1.8	7	2
G	参加率(%)	1.6	×	×
	参加回数(回/月)	2.6		
H	参加率(%)	8.3	×	○
	参加回数(回/月)	1.5		0.5

63 に関しては、アンケート内容が不十分であったため、別の見地から分析することとする。こうして見ると、8 はここでも多くの活動に参加していることが分かる。参加率の低い活動にも参加しており、地域活動への積極性が伺える。39 は、8 に比べれば消極的だが、参加率が割と高い活動には参加している。また、ネットワーク図から、自治会の繋がりで呼びかけていることが分かる。表-2 からは活動 A に積極的に参加していることが分かるが、この活動 A とは自治会を含んでいる。アンケート解答者の参加率も 62.8% と高く、ワークショップへの参加を呼び掛けるには格好の機会であると考えられる。

4. まとめ

本研究により、核となる人物は、多くの人々と関わる機会を自ら設けているということが明らかになった。8 の様に複数の組織に所属するというのは、直接的な効果だけでなく、派生効果も高い。また、39 の様に、多くの人々が集まる活動に積極的に参加するのも、直接的な効果が生まれやすい。今後は 63 について様々な見地から分析すること、参加者の増減に深く関与するものについて考えていくことが課題である。